古英語における動詞・不変化詞構文の構造について

石　川　一　久

1．序

これまで生成文法において、動詞・不変化詞構文（verb-particle constructions）（以下、V-prt 構文と呼ぶ）の統語分析は、現代英語が中心である。[(1)] 古英語（Old English）（以下 OE と呼ぶ）については、Koopman (1985, 1990)、van Kemenade (1987)、及び Pintzuk (1991, 1993) らの研究がある。これらの研究では、動詞とその補部の語順を知る上で不変化詞の位置が重要な手がかりとなることが示されたが、OE におけるこの構文の構造については十分に検討がなされてこなかったように思われる。本論では、OE における不変化詞の特性と生起位置ついて考慮しながらこの構文の統語構造について詳細に分析する。

Ishikawa (1999, 2005) では、V-prt 構文は 3 つの型に分類されている。

(1) a. He cut the branches off.
　　b. He cut off the branches.

(2) a. She ran the pamphlets off.
　　b. He ran off the pamphlets. (ran off = printed) (Fraser (1974: 2))

(3) a. I'll look the information up.
　　b. I'll look up the information. (look up = examine)

具体的にはまず、(1) を単純結合型（simple combination type）と呼ぶ。これは、不変化詞が空間的な意味（spatial meaning）を持ち、「動詞＋不変化詞」全体が、動詞と不変化詞それぞれの文字どおりの意味を組み合わせた意味になる型である。次に、(2) の不変化詞はそれ自体の意味を失っており、かつ動詞も選択特性が本来のそれとは異なっている。このタイプを純粋イディオム型（pure idiom type）と呼ぶ。(3) の不変化詞はそれ自体の「完了」の意味は保持しつつも、動詞の選択特性が本来のそれとは異なっている。このタイプを混合イディオム型（hybrid idiom type）と呼ぶ。[(2)] 単純結合型は、OE 期から存在しており、現代英語に至るまでに構造が変化したと考えられ、(2)(3) のイディオム型は、OE 期には存在しなかったと考えられる。本論では、単純結合型の OE における構造分析とその構造変化について考察する。

本論の構成は以下の通りである。まず 2 節で、Bowers (1993, 2001) の文構造及び Ishikawa (1999, 2005) の分析に基づいて、現代英語における単純結合型 V-prt 構文の構造を明らかにする。 3 節で、OE 期における単純結合型 V-prt 構文の構造について考察する。その際、不変化詞はどのような範疇として、統語上どの位置に生成されたのかについて詳細に分析する。 4 節は結語である。

2．現代英語における単純結合型 V-prt 構文の構造

最近の研究では、現代英語の単純結合型 V-prt 構文の構造は、主に二つの立場から分析されてきた。一つは、Kayne (1985)、Hoekstra (1988), Guéon (1991) 等の立場で、「目的語＋不変化詞」を小節（small clause）と分析するものである。もう一つは、Johnson (1991)、Koizumi (1993) 等の立場で、「動詞＋不変化詞」が複合動詞として単一の語彙項目を形成

していると分析するものである。しかしながら、Ishikawa (1999: 333–337) で指摘されているように、これらの分析は幾つか問題を含んでいる。従って、これらの分析は採用せず、Ishikawa (1999, 2005) の分析に従う。

Ishikawa (1999: 342) は、(1) の off のような不変化詞が、意味的・統語的観点から、結果述語（resultative predicate）に類似していることに注目している。意味の観点において、Visser (1963: 597)、Bolinger (1971: 85)、及び Tenny (1994:148) によれば、この不変化詞は終点（terminus）または結果（result）を表す（cf. Ishikawa (1999: 342)）。次に、統語的観点において、この不変化詞は (1–3)b のように、目的語の前に生起できるが、(4) のように、結果述語も同様の分布が可能である (cf. ibid.)。

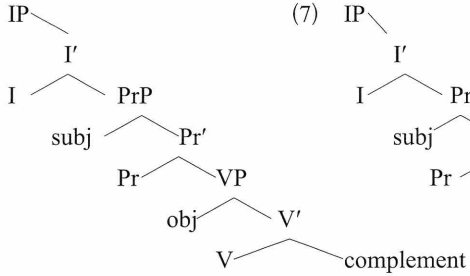
(4) a. The president cut short his news conference. (Fraser (1974: 35))
b. Break open the cask. (Bolinger (1971: 70))
c. Will it bleach white the undies? (Bolinger (1971: 74))

更に、目的語が代名詞の場合、不変化詞は目的語の前に生起できないが、これは (5) に示すように、結果述語と同様である（cf. ibid.）。

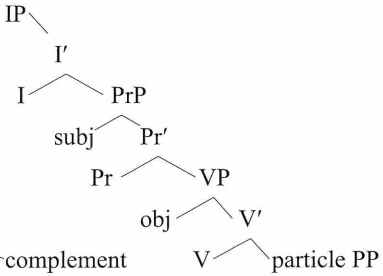
(5) a. *He painted red it.
b. *They set free him. (Fraser (1974: 36))

このことから、不変化詞は、結果述語と同じ位置に生成されると仮定できる。これまで、Rothstein (1983)、Ike-uchi (1991)、Carrier and Randall (1992) 等、結果述語に関する標準的な分析によると、結果述語は、V の姉妹（sister）位置に生成される。ここでは、(6) のような Bowers (1993, 2001) の文構造を仮定しているので、基本的に Ike-uchi (1991) の二項枝分かれ構造を採用し、単純結合型 V-prt 構文の構造を (7) のように仮定する。

(6)



(7)

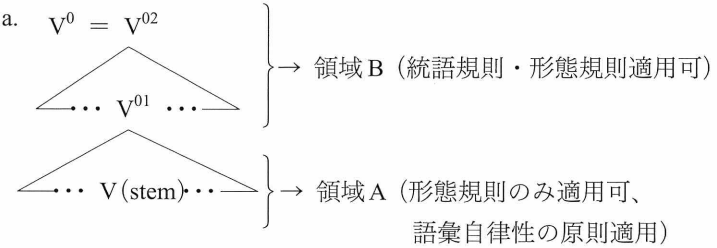


(Bowers (1993, 2001))

尚、不変化詞を PP と分析したのは、Emonds (1972, 1976)、Aarts (1992)、den Dikken (1990, 1995) 等に従い、不変化詞は目的語を取らない前置詞 (intransitive preposition) とする立場に立っていることによる。

また、V^0内の構造に関しても、Ishikawa (1999, 2005) に従う。すなわち、主要部 V^0は、更にその中で V^{01} と V^{02}の 2 つのレベルに分かれると考える。そして、(8) に示すように、V^{01}より下位の要素の属す領域は純粋な形態論領域であり、語彙自律性の原則 (Principle of Lexical Integrity) (9) に従う領域で、領域 A (domain A) と呼ぶ。

(8) a.



(9) Principle of Lexical Integrity

No syntactic rule can refer to elements of morphological structure.

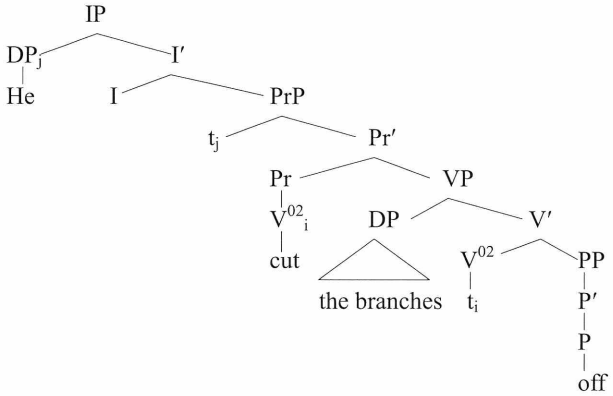
(Lapointe (1980: 8))

故に、領域 A では統語規則が適用できない。他方、V^{01}及び V^{02}の属す

領域は形態規則だけでなく統語規則も適用できる領域であり、(9) に従わない。従って、この領域内への要素の編入（incorporation）、及びこの領域からの脱編入（excorporation）が可能となる。(8) に示されるように、この領域を領域 B と呼ぶ。

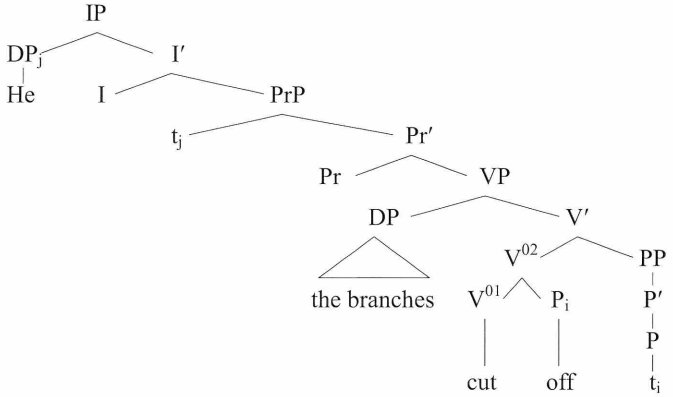
次に、(7) に基づいて、単純結合型 V-prt 構文 (1a) 及び (1b) の派生を明らかにする。まず、(1a) の派生は、概略 (10) のようになる。

(10)

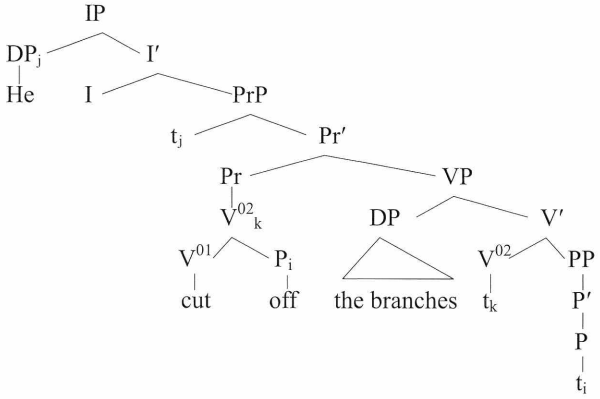


Bowers (2001: 302) に従い、Pr の V 素性（[+V, −N]）は現代英語で強いと仮定すると、(10) に示すように、cut は Pr 位置に顕在的に（overtly）移動する。主語 DP の He も、EPP の要請で、PrP 指定部位置から IP 指定部位置へと移動する。次に、(1b) の派生は (11) のようになる。

(11) a.



b.



まず、(11a) のように、P である off が、動詞 cut の領域 B 内に編入（incorporate）し、複合動詞 V^{02} cut off が形成される。次に、(11b) のように、この複合動詞が Pr に移動する。

以上、現代英語における単純結合型 V-prt 構文の構造及びその派生の仕方を明らかにした。それでは、OE においてこの構文の構造はどのようであったのか。

3．OE 期の V-prt 構文

本節では、前節で見た Bowers の文構造に基づいて、OE の不変化詞がどの位置にどんな範疇として生成されたかについて考察する。

3.1　不変化詞の分類

不変化詞が生起する位置と範疇について考察する上で、Hiltunen (1983) が行った不変化詞の分類に注目することが重要である。Hiltunen は、不変化詞を (12) のように、句副詞（phrasal adverb）と前置詞的副詞（prepositional adverb）に分類した。

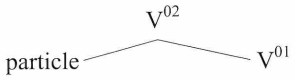
(12) a.　phrasal adverb
　　adun (‘down’), aweg (‘away’), forð (‘forth’), up, ut (‘out’), etc.

　　b.　prepositional adverb
　　beforon (‘before’), æfter (‘after’), behindan (‘behind’), ofer (‘over’), on, in, betweonan (‘between’), of (‘off’), under, geond (‘through’), þurh (‘through’), wið, ymb, etc.

句副詞とは (12a) のように、通常前置詞として生起しないものを指し（cf. Hiltunen (1983: 20)）、前置詞的副詞とは (12b) のように、目的語を取る前置詞としても用いられるが、目的語のないものを指す（cf. Hiltunen (1983: 21)）。本論では、句副詞について取り扱うことにする。

これまで Koopman (1985, 1990)、van Kemenade (1987) 等、OE における V-prt 構文の分析では、(11a) のような不変化詞の V^0 (= V^{02}) 内への編入操作はなく、不変化詞は V^0 内に基底生成される。(8) に基づく表記をすれば、(13) のようになる。

(13)

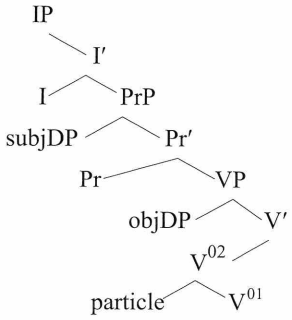


次節では、句副詞に関してこの構造が妥当であるかどうかについて具体的に検討する。

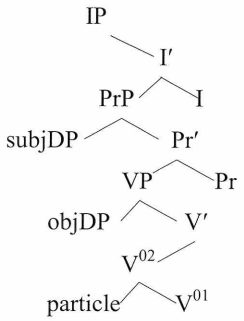
3.2 句副詞の生起する位置

(13) の動詞複合体は、もとは Bowers の文構造とは異なる文の枠組みで仮定された構造である。従って、まず Bowers の文構造のもとで、(13) が実際の語順を導けるかを検討する。具体的には、構造 (14) で正しい事実が得られるかどうかを見てみる。

(14) a.

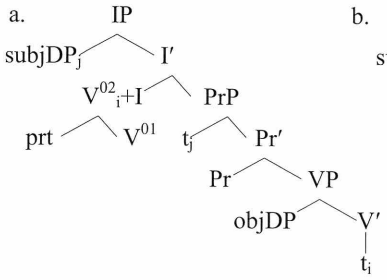


b.

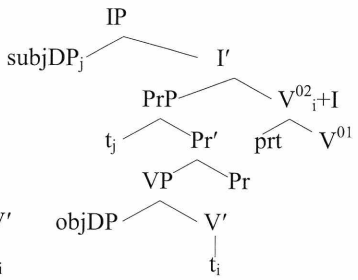


まず、(14a, b) における V^{02} 全体を移動した場合、それぞれ (15a, b) の構造が得られる。

(15) a.



b.



(15a, b) は、それぞれ (16a, b) に示すように、正しい予測であることがわかる。

(16) a. þæt heo onweg adyde þa gemynd þara treowleasra cyninga (Bede 154.10)

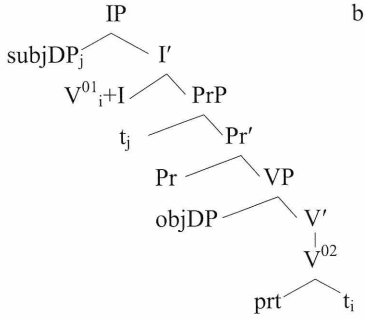
that they away did the record of the faithless kings (Koopman (1985: 112))

b. þæt he his stefne up ahof (Bede 154.28)

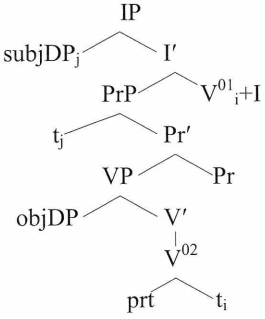
that he his voice up lifted (Pintzuk (1991: 77))

(15a)(15b) の下線部要素の線形順序が、それぞれ (16a)(16b) で確認できる。更に、(14a, b) における V^{02} 内の V^{01} のみを移動した場合、それぞれ (17a, b) の構造が得られる。尚、この移動は、(8) における V^{02} の領域 B からの脱編入であり、(9) に違反していない。

(17) a.



b.



(17a, b) も、それぞれ (18a, b) に示すように、正しい派生であることがわかる。

(18) a. þæt he wearp þæt sweord onweg (Bede 38.20)
that he threw the sword away (Pintzuk (1993: 16))

b. (=(16b))
þæt he his stefne up ahof (Bede 154.28)
that he his voice up lifted (Pintzuk (1991: 77))

ここで注意すべきことは、van Kemenade (1987: 32) 及び Pintzuk (1991: 91–92) の観察を総合すると、(19) のように、定形動詞と不変化詞がこの順で現れる場合、動詞の項で両者の間に介在できる要素は目的語 DP しかない。(18a) はこの制限に従っている。

(19) finite V - object DP - particle (van Kemenade (1987: 32))

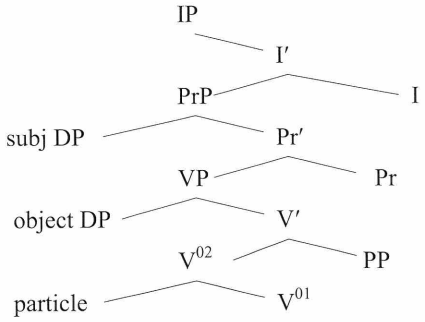
Bowers の構造からすれば、不変化詞の左側にくる項は目的語 DP しかありえない。従って、(19) の語順はそのまま Bowers の構造に基づいた (17a) によって導かれることになる。

更に、不変化詞–定形動詞語順の場合にも、表層語順の制限があることに注意する。van Kemenade (1987: 32) の観察によると、(20) に示すように、両者の間に介在できる項は PP であり、目的語 DP は決して介在できない。具体例は (21) である。この制限も、Infl 後置の構造 (22) からすぐさま導かれる。

(20) particle { PP / *object DP } finite V (ibid.)

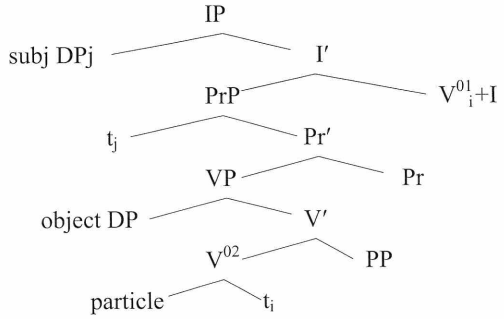
(21) þær he up of þæm sonde scyt (*Or* 11.10)
where it up from the sand shoots (Pintzuk (1991: 77))

(22)



(22) の構造において、V^{01} が I に移動したとすると、(23) のようになり、(20) の語順制限が正しく説明できる。

(23)



以上のように、ここでの枠組みの中で (13) を仮定しても、正しい事実が得られることを示した。

しかしながら、(13) は、まだ Koopman や van Kemanade 等の研究で十分に検討されたとは断言できない。従って、以下では、(13) を更に支持する論拠を示す。まず、不変化詞が V^{02} 内に存在している証拠を挙げる。まず、(24a) の型である (24b) を見てみる。

(24) a. subject + particle + finite verb + ……

b. hie ealle ut aflugon on Creca lond æfter Sillan 7
they all out fled onto the land of the Greeks after Sillan and
æfter Pompeiuse (*Or* 236.18)
after Pompeius (Hiltunen (1983: 121))

(24b) は Infl が VP に先行する型と言える。もし仮に、(24b) を Infl 後行型とした場合、(25) のように定形動詞の後の構成素はすべて Infl の後に右方移動しなければならない。しかし、複数のこの種の右方移動は、(26) の非文法性からわかるように、一般に許されない。

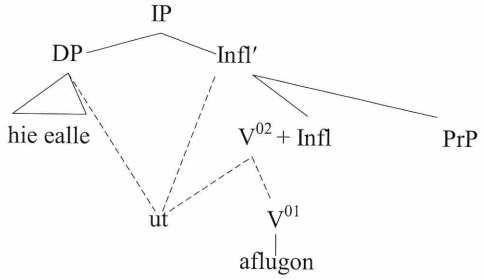
(25) *[$_{IP}$ hie ealle t_i t_j ut [$_{Infl}$ aflugon]] [on Creca lond]$_i$ [æfter Sillan 7 æfter Pompeiuse]$_j$

(26) a. *John plays t_i t_j every night [nocturnes composed by little-known musicians]i [on this violin of his brother's]$_j$.
(中島 (1984: 77))

b. *John sent t_i t_j by special delivery [his paper on binding theory]$_i$ [to the reviewer for the journal]$_j$. (ibid.: 29)

このように考えると、Infl 先行型 (24b) の不変化詞 ut は、(27) に示すように、主語 DP に右から付加されているか、Infl′に付加されているか、V^{02}内にあるかのどれかである。

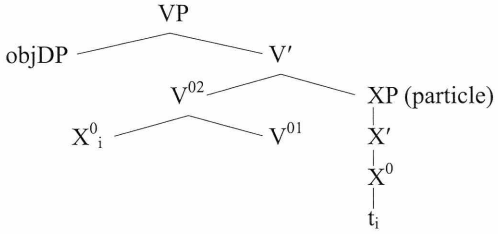
(27)



しかし、ut が修飾するのは、主語 DP でも Infl 要素でもなく動詞であり、ut は V^{02} 内にあると考えるのが妥当である。

次に、OE において V^{02} 内に存在する不変化詞は、統語規則によって編入されたものではなく、V^{02} 内に基底生成されたものであることを示す。すなわち、(28) の理論的可能性を排除する。排除すべき (28) は、不変化詞 XP が V^{02} の外に生起し、その主要部 X^0 が顕在的統語部門で V^{02} に編入されて構造 (13) が形成される可能性である。Koopman や van Kemanade 等これまでの研究では、こうした検討はなされてこなかった。

(28)



先に述べたように、ここでは XP が句副詞の場合について考察する。

以下では、(28) を排除する論拠を示す。すなわち、句副詞は、(28) の V^{02} 外の XP 位置には生じず、(29) のように V^{02} 内に生成されることを示す。

(29)

3.3　句副詞の範疇と V^{02} 内生成の妥当性

(29) の具体的な議論に入る前に、句副詞の範疇を明らかにしておかなければならない。Koopman や van Kemanade 等の研究では、不変化詞の具体的な範疇について触れられてこなかった。従ってここでは、まずその点について考察する。Emonds (1972) によれば、現代英語において、

句副詞は通常の PP と同様の振舞を示すので、PP と分析される。例えば、(30) に示すように、強意語である right は、一般に PP のみを修飾する特性を持つが、(31) に示すように、句副詞も修飾できる。[(3)]

(30) a. Bill put the spices right on the meat.

b. Some people can't work right before dinner.

c. *Bill visits Europe right often, frequently, etc.

d. *Those girls were right attractive. (Emonds (1972: 551))

(31) a. He put the toys right back.

b. They looked it right up and left.

c. John brought the bottles right down. (Emonds (1972: 552))

しかしながら、*OED* (= *Oxford English Dictionary*) の right の項目において、OE の強意語の用法の例に (31) のような例は存在しない。具体的に、right のここでの議論に関わるそれぞれの意味おいて、直後に句副詞が生起する句副詞と初出年代および初出例を次に示す。ただしここでは、句副詞の意味は文字通りの空間的な意味を示す場合を対象としている。

(32) right (*OED*)

i) Of motion or position: Straight; in a direct course or line.

forth: 1530 *Palsgr*. 827/1 Ryght forthe, tout droyt auant.

up: c 1440 in *Househ. Ord*. (1790) 434 Dresse hit forthe, and almonds or paynes fryed, and styk hom right up therin.

ii) In a straight or direct course leading quite up to a place, person, or thing; hence, all the way to, into, round, through, etc.; also with advbs. as down, along (also in sense 'all along' (chiefly U.S.)), in, back.

down: 1530 *Palsgr*. 827/1 Ryght downe, tout droyt embas.

iii) Quite or completely off, out, round, etc.

off: c 1400 *Sege Melayne* 329 At þe erthe he smate righte of his

hede.

out: 1894 H. *Nisbet Bush Girl's Rom.* 115 We will, Captain, blot them right out.

更に、ヘルシンキ・コーパスで調査しても同様である。[(4)] 従って、OE の句副詞を PP と分析するのは困難である。それではどんな範疇であろうか。ここでは、(33) の下線部のように、句副詞が、to ('too'), feor ('far'), swiðe ('very') のように副詞を修飾する語にしばしば修飾されることに注目する。

(33) a. þy læs hi for longum gesælþum hi to up ahæbban
(Ælfred, *Boeth.* (Fox) 228.3)
lest they for long felicity themselves too up raise
(Visser (1963: 599))

b. þonne hi hlifiað feor up ofer þa oðre eorðan
(*HomS* 40.1 (Nap 49) 255)
when they rise far up over the other ground
(Healey and Venetzky (1980))

c. Đonne ahebbað ða synfullan swiðe up hira hornas
(K. ÆLFRED *Gregory's Past C.* liv. 425)
then raise the sinners exceedingly up their horn (*OED*)

d. ne hebbe ge to up eowre hornas. (*CP* 425.22)
not raise you too up your horns

[The underlining is mine.]

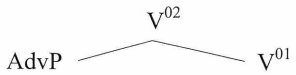
先のようにこれらの強意語が指定辞であるとすると、句副詞は (34) に示すように、XP 範疇である AdvP として分析できる。

(34) phrasal adverb: [$_{AdvP}$ (intensifier) [$_{Adv'}$ Adv^0]]

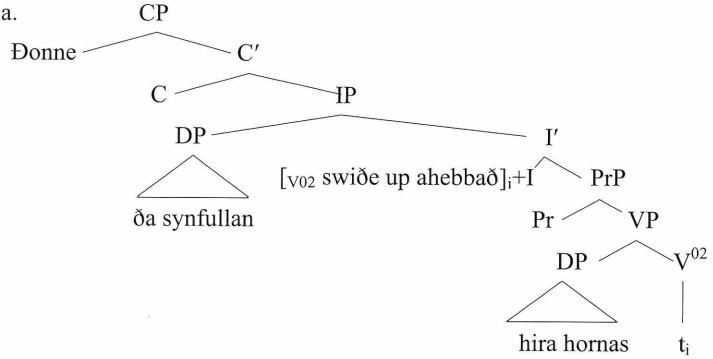
それでは、(28) でなく (29) が更に支持される論拠を示す。それは、(33c) と (33d) に関わる。(33c) では、目的語 hira hornas が、強意語 swiðe

のついた句副詞 up より後にある。ということは、up は何らかの方法で hira hornas の前に移動しなければならない。基底生成された構造 (29)、具体的には (35) を仮定すれば、(33c) は (36a)、(37b) の順でうまく派生することができる。

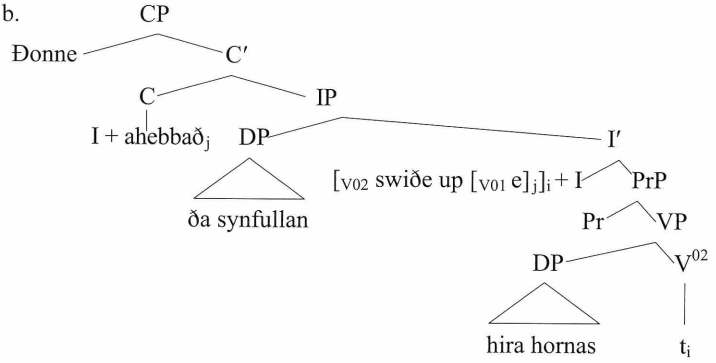
(35)



(36) a.



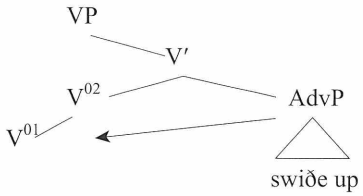
b.



まず (36a) のように、複合動詞 V^{02} である swiðe up ahebbað が一体となって I 位置まで移動し、次に、(36b) のように、その I 位置から V^{01} である ahebbað だけが C 位置に移動する。

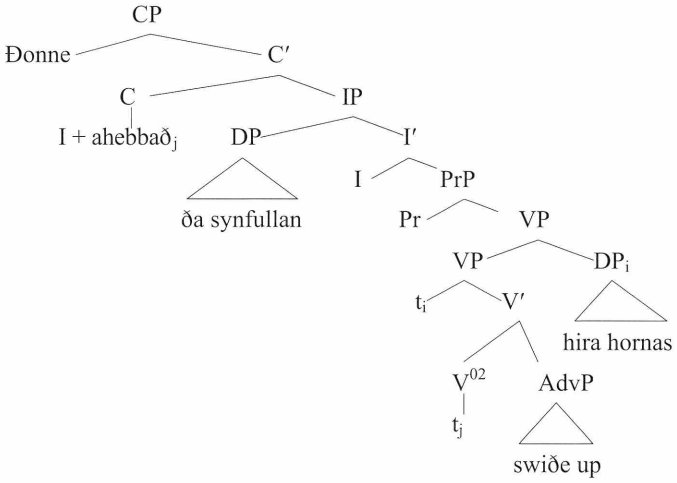
一方、もし仮に、(28) の XP 位置に AdvP の swiðe up があるとすると、(36a) と同じように複合動詞 V^{02} として I 位置に移動するためには、(37) に示すように、一度この AdvP を統語的操作によって V^{02} 内に入れ込む必要がある。

(37)



しかし、Baker (1988) 等の研究によれば、編入操作は主要部移動であることから、この移動は許されない。それでは、(38) のように、この AdvP をそのままにして目的語の hira hornas を右方移動する派生が考えられるかもしれない。

(38)



しかし、van Kemenade (1987: 40), Pintzuk and Kroch (1989:125) によれば、

OE において、CP 後置や PP 後置と異なり、DP 後置は「重い（heavy）」要素のみが後置される重名詞句転移と分析されるべきだとしている。この見解に基づくと、目的語 DP hira hornas は「重く」ないので、(38) のように後置したとは考えにくい。さらに (33c) と同じ語順を持つ (33d) にも、ほぼ同様の議論が成り立つ。以上から、句副詞が V^{02} (= V^{0}) 内に生成される構造 (35) が支持された。

尚、このように XP 範疇が X^{0} 範疇内に存在する構造について、Baker (1988) 等これまでの研究では、通常 XP 範疇が X^{0} 範疇内に統語部門で編入されることは許されない。しかし、(35) のように XP 範疇が X^{0} 範疇内に基底生成されることは、これまで DiSciullo and Williams (1987), Iatridou (1990), Lieber (1992) 等の研究で他の事例を根拠に認められており、不適当ではないと考えられる。例えば、Lieber (1992: 56) は形態論の立場から、(39) のような句複合語（phrasal compound）に対して、(40) のように XP 範疇を N^{0} 範疇内に生成する分析をしている。

(39) a. floor of a birdcage taste

b. over the fence gossip

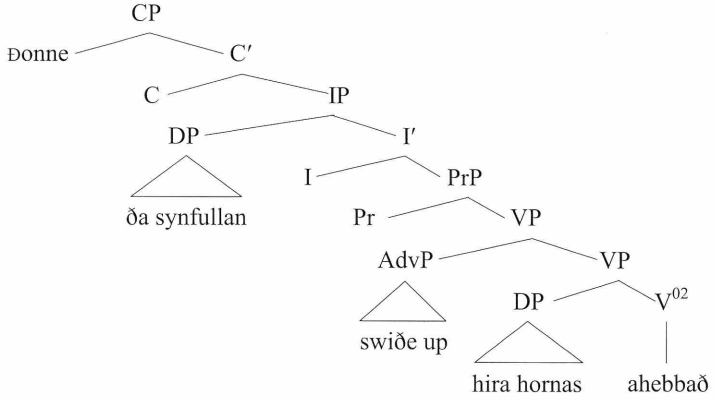
(40) a. $[_{N}\ [_{NP}$ floor of a birdcage$]\ [_{N}$ taste$]]$

b. $[_{N}\ [_{PP}$ over the fence$]\ [_{N}$ gossip$]]$ (Lieber (1992: 56))

このことからも、(35) は支持されることとなる。

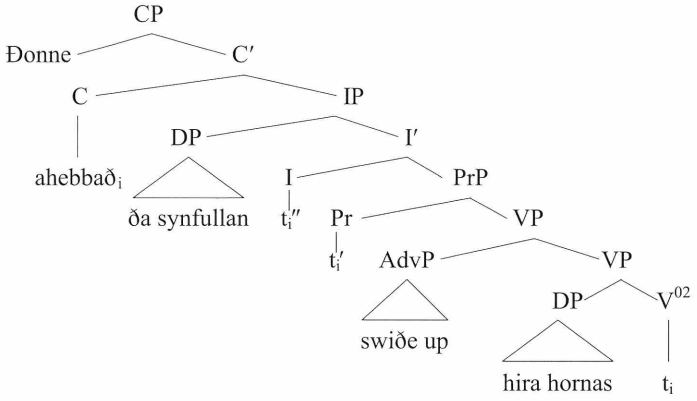
上の議論で、(35) が支持される論拠として、(35) を仮定すれば (33c) と (33d) の「up を含む AdvP- object DP」の語順を正しく導けることを示した。しかしながらここで、この語順を導く派生として、AdvP を V^{02} 内に生成せず、(41) に示した (33c) の基底構造のように VP に付加する構造の可能性も考察しなければならない。不変化詞がいわゆる VP Adverb として機能するという仮定である。この可能性を否定することによって、(35) はさらに支持されると言えよう。

(41)



確かにこの構造から、(42) に示すような派生で、(33c) の表層語順は得られそうである。

(42)



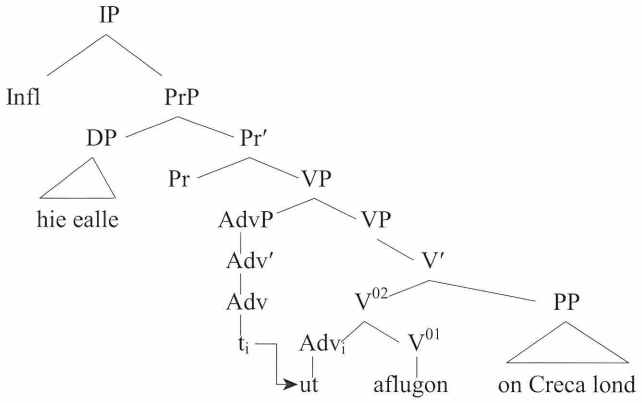
しかし、この VP 付加位置が一般に不変化詞 AdvP が生起する規範的な位置であると仮定すると、不変化詞と動詞が複合体として移動したと考えられる場合に理論上の問題が生じる。

ここでは、(24b) を例に取り考察する。ここに (24b) を再度提示する。

(24b) hie ealle ut aflugon on Creca lond æfter Sillan 7
they all out fled onto the land of the Greeks after Sillan and
æfter Pompeiuse (*Or* 236.18)
after Pompeius (Hiltunen (1983: 121))

(27) で議論したように、ut は V^{02} 内にあることが明らかになった。すなわち、[$_{V02}$ ut aflugon] という複合体として最終的に Infl に付加されている。ここで、ut が VP に付加されているというここでの仮定の下で、この複合体を統語規則によって形成すると仮定すると、下記に示すように、Adv の ut が V^{02} 内に編入される派生が考えられる。

(43)



(43) で、AdvP は VP に付加された位置にあり、その中から主要部 Adv が抜き出され V^{02} 内に編入されている。しかしながら、一般的に付加詞 (adjunct) からの抜き出し操作は許されない[(5)]。従って、(24b) を派生するのに AdvP を VP に付加することは支持されない。ゆえに、(41) の構造も排除される。以上の議論から、(29) すなわち (35) がさらに支持されると言える。

3.4 句副詞の V^{02} 内生成の新たな可能性

しかしながら、確かに (35) は支持されるわけであるが、(35) だけで古

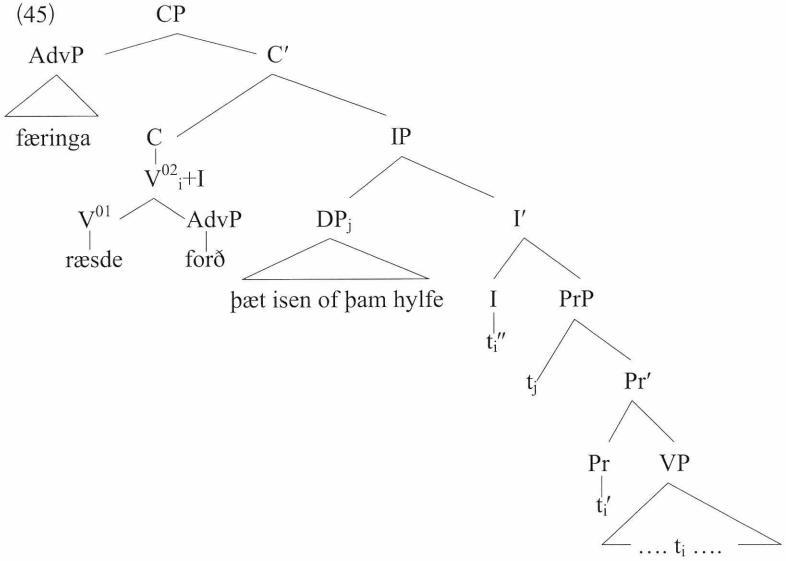
英語の V-prt 構文を扱うことは困難である。それは、次の例に関わる。

(44) a. þærrihte æt þam forman gedelfe swegde ut ormæte wylspring
(YCOE: cocathom1,*ÆCHom*_I,_37:499.77.7)[6]
immediately at the first delving rushed out immense well-spring

b. þa færinga ræsde forð þæt isen of þam hylfe
(YCOE: cogregdH,*GD*_2_[H]:6.113.23.1101)
then suddenly rushed forth that iron of the helve

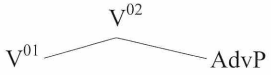
(44a) では、先頭要素 þærrihte æt þam forman gedelfe の後に、動詞＋句副詞 swegde ut が生起しており、その後に主語 ormæte wylspring が続いている。(44b) も同様に、動詞＋句副詞 ræsde forð が、先頭要素 þa færinga に後続し、その後に主語 þæt isen of þam hylfe が生起している。これらの構文は、いわゆる V2構文と考えられ、(45) に示すように、「動詞＋句副詞」が複合体 V^{02} として C^0 位置に繰り上がっていると仮定することができる。

(45)



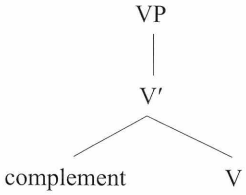
このように、明らかに「動詞＋句副詞」の語順で複合体をなしていると考えられる事例は、(35) では派生できない。このことから、(35) の他に、(46) に示すように、動詞が副詞に先行する V^{02} 構造も仮定することが妥当であると考えられる。

(46)

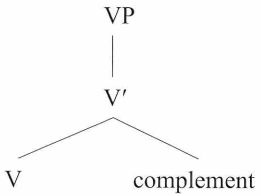


ここでは、(35) と (46) の両方を仮定することに関して、Pintzuk (1991) の二重基底部仮説（The Double Base Hypothesis）に準ずるものと考える。Pintzuk は OE の VP 内の主要部 V とその補部の位置関係、および IP 内の主要部 I とその補部 VP の位置関係について、主要部先行型と主要部後行型の 2 種類の構造を仮定した。例えば、前者の位置関係については以下に示される通りである。

(47) a.



b.



この仮説にならって、ここでは V^{02} 内の領域 B でも同様な統語的原理が関与できると考える。具体的には、主要部 V^{02} 内の更なる主要要素を V^{01} と見なすと、V^{02} 内においても、AdvP -V^{01} と V^{01}—AdvP の両方の線形順序となる構造 (35) と (46) が仮定できる。

更に、(35) と (46) を間接的に支持する論拠として、OE において、句副詞が動詞の存在に依存していたことが挙げられる。このことは、ヘルシンキ・コーパスの OE の部分および YCOE における調査の結果、本動詞のない (48) や (49) のような現代英語の構文が存在しないことから

明らかである。

(48) He is out.

(49) a. Out!

b. Back!

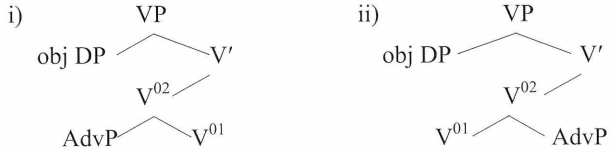
c. Head up!

d. Toes out! (Bolinger (1971: 87–88))

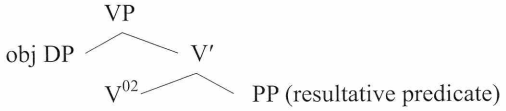
以上、(35) と (46) の構造が正しいことを示した。

以上のことから、OE の不変化詞は、必ず V^{02} 内に生成されたことがわかる。このように、不変化詞である句副詞は本動詞と密接に関わっていたと言える。ここで、OE と現代英語における V-prt 構文の VP 構造の違いについて、まとめると、(50) のようになる。

(50) a. OE



b. PE



(50b) のように、不変化詞が結果述語 PP として動詞の姉妹位置に生成されるようになったのは何が原因であろうか、又、その変化は英語史上いつ頃であろうか。この点については、また稿を改めることにする。

4．結語

本論では、Ishikawa (1999, 2005) の分析、及び Bowers (1993, 2001) の文構造に基づいて、不変化詞が句副詞の場合について、単純結合型 V-prt 構文の OE における統語構造について考察した。X^0範疇内に統語規則が適用可能な領域 B を仮定することによって、OE 期においては、不変化詞は PP としてではなく、AdvP として動詞 V^{02}内に、V^{01}の右側あるいは左側に生成されたと主張した。

注

(1) 本論の「不変化詞」とは Fraser (1974: 2)、嶋田 (1985: 4–5) に従い、(i) のように、動詞の目的語の後にも生起できるものを指し、(ii) のように、それができないものは不変化詞とは見なさないものとする。

(i) a. The child put away the plate. (Shimada (1985: 4))
b. The child put the plate away. (ibid.)

(ii) a. They looked at the picture. (ibid.)
b. *They looked the picture at. (ibid.: 5)

(2) ここでは、Ishikawa (1999) に従い、2 つのイディオム型を区別するために、不変化詞の直前に強意語 right をおけるか否かを判断法としている。混合イディオム型の不変化詞は固有の意味を保持しているので、強意語 right をその直前に置くことができる。

(i) a. I'll look the information right up. (Fraser (1974a: 25))
b. The plane took right off. (ibid.)

一方、純粋イディオム型は、それが不可能である。

(ii) a. *John put his vacation right off until Christmas. (put off = postpone) (Emonds (1972: 552))
b. *The store keepers took the students right in. (take in = deceive) (ibid.)

(3) (31b) の up は、「上方を」という文字どおりの意味で用いられている。

(4) The *Helsinki Corpus of English Texts: Diachronic and Dialectal*, ICAME

(International Computer Archive of Modern English), supervised by Matti Rissanen and Ossi Ihalainen, 1991.

(5) 伝統的には、Huang (1982) の摘出領域条件（Condition on Extraction Domain (CED)）にその議論が本格的に始まる。その後開発される一連の理論の枠組み内で、付加詞からの抜き出し操作に関して説明が試みられている。付加詞からの主要部抜き出しが禁止される現象に関しては、例えば、Baker (1988) は、GB 理論の枠組みで下記のような空範疇原理 (Empty Category Principle (ECP)) で説明を試みている。

(i) The Empty Category Principle (ECP)

a. Traces must be PROPERLY GOVERNED.

b. A PROPERLY GOVERNS B iff A governs B, and A and B are coindexed. (Baker (1988: 39))

(i) のもとでは、(43) において、AdvP が付加位置にあるため、ut の痕跡 t_i は Adv_i に適正統率されない。

なお、ミニマリスト・プログラム（cf. Chomsky (2000, 2001)）における位相不可侵条件（Phase Impenetrability Condition (PIC)）による CED 効果の説明の妥当性については、Boeckx (2012) 参照。

(6) YCOE = the *York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose*, Ann Taylor, Anthony Warner, Susan Pintzuk, Frank Beths, Department of Language and Linguistic Science, University of York, Heslington, York

参考文献

Aarts, B. (1992) *Small Clauses in English: The Nonverbal Types, Topics in English Linguistics 8*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Baker, M. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.

Boeckx, C. (2012) *Syntactic Islands*, Cambridge University Press, Cambridge.

Bolinger, D. (1971) *The Phrasal Verb in English*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.

Bowers, J. (1993) "The Syntax of Predication," *Linguistic Inquiry* 24, 591–656.

Bowers, J. (2001) "Predication," in M. Baltin and C. Collins, eds., *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, Blackwell, Oxford.

Carrier, J. and J. H. Randall (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure

of Resultatives," *Linguistic Inquiry* 23, 173–234.

Chomsky, N. (2000) "Minimalist Inquiries," in R. Martin, D. Michaels, and Juan Uriagereka, eds., *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Chomsky, N. (2001) "Derivation by Phase," in M. Kenstowicz, ed., *Ken Hale: A Life in Language*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Dikken, M. den (1990) "The Structure of English Complex Particle Constructions," in R. Bok-Bennema and P. Coopmans (eds.) *Linguistics in the Netherlands 1990*, Foris, Dordrecht.

Dikken, M. den (1995) *Particles: on the Syntax of Verb-Particle, Triadic, and Causative Constructions*, Oxford University Press, New York and Oxford.

DiSciullo, A-M. and E. Williams (1987) *On the Definition of Word*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Emonds, J. (1972) "Evidence that Indirect Object Movement is a Structure-Preserving Rule," *Foundations of Language* 8, 546–561.

Emonds, J. (1976) *A Transformational Analysis to English Syntax*, Academic Press, New York.

Fraser, B. (1974) *The Verb-Particle Combination in English*, Taishukan, Tokyo.

Guéron, J. (1991) "Particles, Prepositions, and Verbs," in Mascar, J. and M. Nespor, eds., *Grammar in Progress*, Foris, Dordrecht.

Healey, A. D. and R. L. Venezky (1980) *A Microfiche Concordance to Old English*, Centre for Medieval Studies, University of Toronto, Toronto.

Hiltunen, R. (1983) *The Decline of the Prefixes and the Beginnings of the English Phrasal Verb*, Turun Yliopisto, Turku.

Hoekstra, T. (1988) "Small Clause Results," *Lingua* 74, 101–139.

Huang, C.-t.J. (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*, Doctoral dissertation. MIT.

Iatridou, S. (1990) "About Agr(P)," *Linguistic Inquiry* 21, 551–557.

Ike-uchi, M. (1991) "On Extraction of Secondary Predicates in English," *MIT Working Papers in Linguistics* 13, 125–162.

Ishikawa, K. (1999) "English Verb-Particle Constructions and a V^0-Internal Structure," *English Linguistics* 16.2, 329–352.

Ishikawa, K. (2005) "Types and Derivations of English Particle Verb Constructions (*Particle Verbs in English: Syntax, Information Structure, and Intonation*. Nocole Dehé (Review Article)) *English Linguistics* 22.1, 103–132.

Johnson, K. (1991) "Object Positions," *Natural Language and Linguistic Theory* 9, 577–636.

Kayne, R. (1985) "Principles of Particle Constructions," in J. Guéron on et al. (eds.) *Grammatical Representation*, Foris, Dordrecht.

Kemenade, A. van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.

Koizumi, M. (1993) "Object Agreement Phrases and the Split VP Hypothesis," *MIT Working Papers in Linguistics* 18, 99–148.

Koopman, W. (1985) "Verb and Particle Combinations in Old and Middle English," in R. Eaton, O. Fischer, W. Koopman and F. van der Leek (eds.) *Papers from the 4th International Conference on English Historical Linguistics*, John Benjamins, Amsterdam.

Koopman, W. (1990) *Word Order in Old English with Special Reference to the Verb Phrase*, Doctoral dissertation, University of Amsterdam.

Lapointe, S. (1980) *A Theory of Grammatical Agreement*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Lieber, R. (1992) *Deconstruction Morphology: Word Formation in Syntactic Theory*, The University of Chicago Press, Chicago and London.

中島平三 (1984)『英語の移動現象研究』研究社、東京.

Pintzuk, S. (1991) *Phrase Structures in Competition: Variation and Change in Old English Word Order*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.

Pintzuk, S. (1993) "Verb Seconding in Old English: Verb Movement to Infl," *The Linguistic Review* 10, 5–35.

Pintzuk, S. and A. S. Kroch (1989) "The Rightward Movement of Complements and Adjuncts in the Old English of Beowulf," *Language Variation and Change* 1, 115–143.

Rothstein, S. (1983) *The Syntactic Forms of Predication*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.

嶋田裕司 (1985)『句動詞』, 大修館, 東京.

Tenny, C. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

Visser, F. (1963) *An Historical Syntax of the English Language*, Part I, Brill, Leiden.